

2024.2.9

TOYOBO
Beyond Horizons

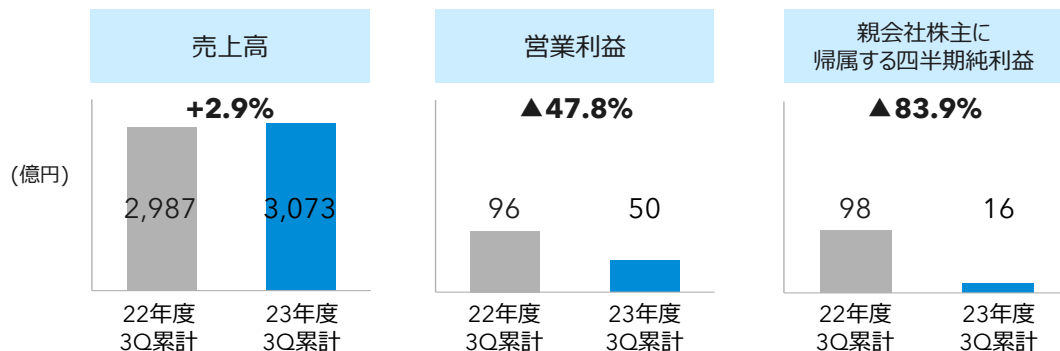
2023年度 第3四半期 決算説明

東洋紡株式会社

みなさま、おはようございます。大槻でございます。決算説明会にご参加いただきましてありがとうございます。決算概要について説明をさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

第3四半期累計実績

液晶偏光子保護フィルムは販売を伸ばすも、PCR検査用試薬の需要減や包装用フィルムの数量減により、増収減益。四半期純利益は 16 億円



2024年3月期通期予想

液晶偏光子保護フィルムの販売は堅調も、包装用フィルム等の回復遅れにより、営業利益を 80 億円に下方修正。当期純利益は 10 億円を据え置く。配当は据え置きを予定

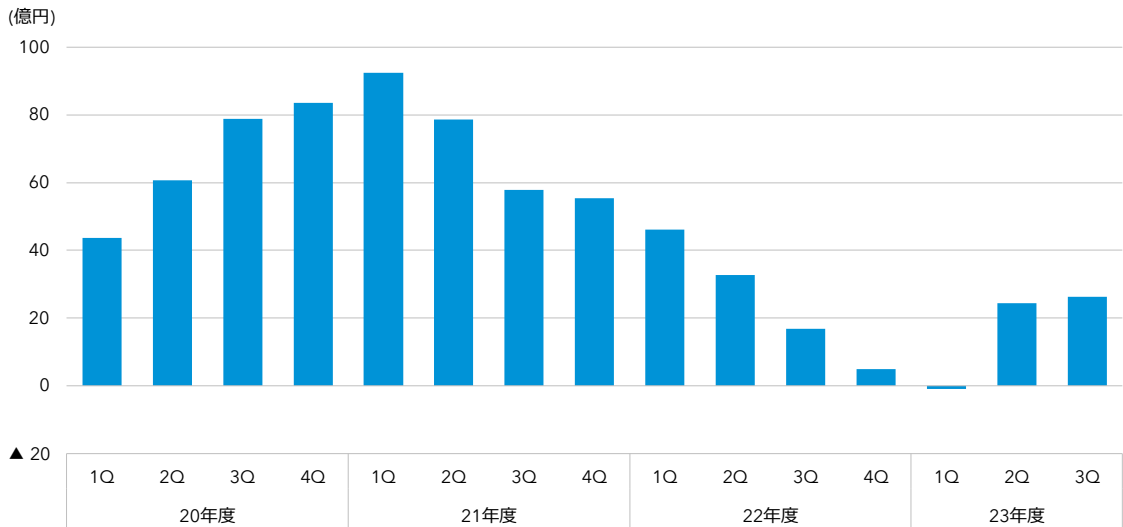
2

まず決算のポイントでございます。液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”は非常に堅調に推移しております。一方、昨年5月に新型コロナウイルス感染症が第5類の分類となり、PCR検査用試薬は、需要を大きく落としました。包装用フィルムは、需要の回復が遅れ、数量が減少しました。昨年度比で見ますと、全体としては増収ながら減益という決算となっております。四半期純利益は16億円でした。

通期予想については、引き続き液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”の販売は堅調ではありますが、包装用フィルムなどの回復遅れを踏まえまして、従来言ってまいりました営業利益100億円を80億円に、20億円下方修正いたしました。なお、当期純利益は10億円を据え置けるとしております。配当も据え置きでいきたいと思っております。

(参考) 四半期別営業利益推移

TOYOBO



3

近年のQ毎の営業利益の推移を示しております。グラフを見ていただきます通り、21年度の後半にかけて、急激な原燃料高が逆風として吹いておりまして、営業利益を落としてきております。今年度に入り、PCR検査用試薬の需要も、想定通りではありますが落ち込んでおります。Q毎の推移では、昨年度の4Qから今年度の1Qあたりが底となり、2Qでぐんと回復の兆しが見えたかなと思ったのですが、3Q時点で、若干の増益ではありますが横ばいで推移しているという認識です。

決算サマリー | PL

TOYOBO

(億円)

	22年度 3Q累計	23年度 3Q累計	増減	
			金額	率
売上高	2,987	3,073	+86	+2.9%
売上総利益	653	648	▲ 5	▲ 0.8%
営業利益	96	50	▲ 46	▲ 47.8%
(率)	3.2%	1.6%	-	-
経常利益	69	24	▲ 45	▲ 65.5%
特別損益	73	12	▲ 61	▲ 83.1%
親会社株主に帰属する四半期純利益	98	16	▲ 82	▲ 83.9%
EBITDA*	240	195	▲ 45	▲ 18.9%
<small>* 営業利益 + 減価償却費 (のれんを含む)</small>				
EPS (円)	109.7	17.9	-	-
ROE*	6.6%	1.1%	-	-
<small>* 年換算ベース (四半期純利益×4/3)÷期首・期末平均自己資本</small>				
減価償却費	144	145	+0	+0.2%
設備投資	278	451	+174	+62.6%
研究開発費	107	118	+11	+10.0%

4

PLでございます。売上高は3Q累計で前年同期比+86億円です。そのうち、フィルムが74億円の増収です。主に工業用フィルム、“コスモシャインSRF”が増収となっております。逆にライフサイエンスは減収となりました。主な要因はPCR関連製品の減収です。環境・機能材も増収に向かっております。残念ながら営業利益は46億円の減益でした。販管費の増加などもございますが、PCR検査用試薬の落ち込み幅にほぼ相当するような形での減益ということで、他のセグメントは凸凹ございますけれども、ほぼ横ばい、という全体感でした。

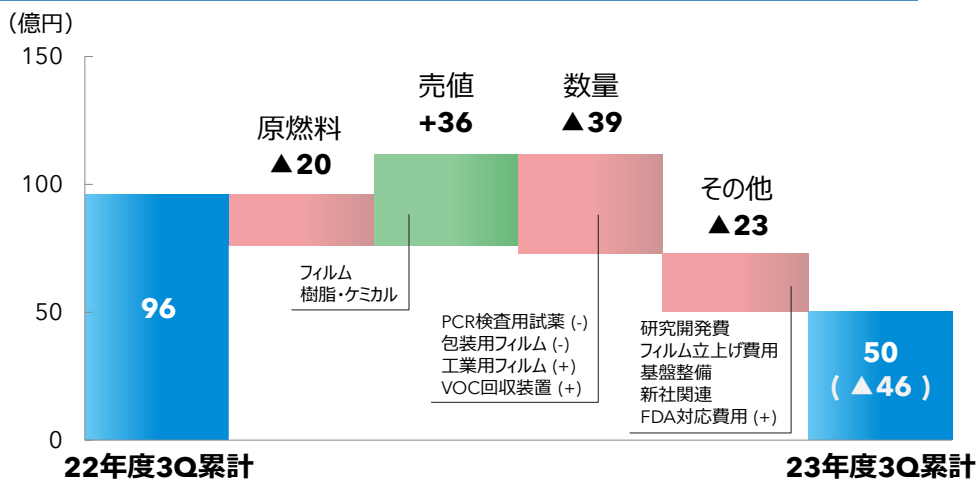
特別損益ですが、昨年度3Q累計は犬山工場の火災に関する受取保険金が73億円ございました。今年度3Q累計の特別損益は12億円で、当期純利益は16億円でした。

減価償却費は145億円ということで、昨年度と同水準となりました。設備投資をいろいろと行っている中での横ばい、と見えると思いますが、昨年度末に減損損失を出しておりますので、その部分が減っております。実質的には、先行投資が続いております分、減価償却費は増えているとご理解いただければと思います。

設備投資は451億円ということで、計画通りでございますが、フィルム、バイオを中心に先行投資を行っておりますので、増えてきております。研究開発費は、いろいろ苦しいところではありますが、将来のネタでございますので、118億円ということで、水準を堅持しています。

営業利益の増減要因

TOYOBO



	21年度		22年度				23年度		
	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q
為替レート (円/US\$)	114	116	130	138	141	132	137	145	148
国産ナフサ (千円/kl)	61	66	86	81	72	67	67	64	73

営業利益の増減分析です。96億円から50億円へ46億円の減益の要因を滝グラフで示しております。

原燃料因が▲20億円です。急激な原燃料価格の高騰を受けまして、国産ナフサ価格と燃料価格の前提は、タイムラグを勘案した数字を示しておりますが、▲20億円のうち、原料部分は+27億円です。原料は概ねナフサリンクでして、ピークを越えてプラスに転じてきております。ですが、燃料部分は▲47億円で、タイムラグを勘案いたしますと、まだ原価計算に高いコストの部分が入っております。原燃料を合計いたしますと▲20億円となっております。これを、売値因の+36億円で取り返しているということです。転嫁率を単純に割り返しますと、181%ということになります。フィルムの原燃料高騰部分について、この一年強、一生懸命売値に転嫁する努力を続けてまいりました。数量が回復しないのは辛いところではあります。しかしながら、過去、未転嫁で終わった部分の損失はまだ取り返しておりませんので、引き続き値上げの努力を続けております。昨年11月に値上げのリリースをさせていただき、今年1月には更に追加の値上げを打ち出させていただきました。

数量因は▲39億円ということで、一番大きいのはPCR検査用試薬でした。そのほかに、包装用フィルムは在庫調整の解消が遅れております。シェアは失ってはおりませんが、数量がなかなか回復してきておりません。工業用フィルムは“コスモシャインSRF”を中心にプラスです。また、リチウムイオン電池セパレータの製造工程に使われておりますVOC回収装置は、少し前倒

しの部分がございますが、好調でした。こういうプラス因がありました
が、全体としては▲39億円という数字でした。

その他因ですが、前向きな仕込みということで続けてきております研究開
発費、そしてフィルムの立ち上げ費用がございました。本来、もう少し立
ち上げが早く進み、費用を抑えられる計画をしておりましたが、若干苦勞
をしています。それから、基盤整備は、引き続ききちんと進めていくため
の費用が出てきています。また、新社関連として、昨年4月に設立いたしま
した三菱商事(株)との合弁会社がスタートした費用が、今期前半を中心に出
ています。FDA（米国食品医薬品局）対応費用は、ご心配をおかけいたし
ました、医薬品製造受託において、FDAからいただいておりますWarning
Letterへの対応に一生懸命頑張っておりました費用です。昨年度は費用を使
いましたけれども、今年度は解除が出来ましたため、費用が減り、プラス
因となりました。

全体として見ると、なんとか売値を一生懸命上げている訳ですが、PCR検
査用試薬を中心に、数量減が非常に厳しく、▲46億円でした。

決算サマリー | BS

TOYOBO

	(B)		(A)	(億円)
	22/3末	23/3末	23/12末	増減(A)-(B)
総資産	5,178	5,889	5,844	▲ 45
現預金	272	607	279	▲ 328
棚卸資産	960	1,219	1,250	+31
有形固定資産	2,276	2,402	2,707	+305
純資産	1,971	2,214	2,209	▲ 5
自己資本	1,949	1,896	1,890	▲ 5
うち利益剰余金	747	705	685	▲ 20
非支配株主持分	23	318	319	+0
有利子負債	1,912	2,294	2,314	+20
D/E レシオ	0.98	1.21	1.22	-
Net Debt / EBITDA倍率*	3.4	5.8	7.8	-

* (有利子負債 - 現預金) <期末> / EBITDA <年換算>

6

BSでございます。現預金が328億円の減少となっております。23年3月末は、現預金が607億円と多くございました。新社設立のときに三菱商事(株)からの払込が3月末にあり、その部分を現預金として持っていたというテクニカルな要因です。その状態で今期スタートいたしまして、有形固定資産は2,707億円と、約300億円の増加となっております。現預金が300億円減少し、有形固定資産が300億円増加しているということです。

D/Eレシオは1.22倍です。約300億円を取り崩しての1.22ですので、D/Eレシオは実質的には厳しく、Net Debtは悪化しています。Net Debt/EBITDA倍率は、先行投資が続く今回の中計で、キャッシュフローをベースにした財務規律を一定程度に維持したいということで新しくKPIとして導入しておりますけれども、Net Debtが増えたことに伴い、7.8倍と悪化しております。何とか中計期間内に、5.0倍という目標に戻すべく考えていきます。

決算サマリー | セグメント別

TOYOBO

(億円)

	売上高		営業利益		
	22年度 3Q累計	23年度 3Q累計	22年度 3Q累計	23年度 3Q累計	増減
フィルム	1,100	1,174	20	15	▲ 5
ライフサイエンス	293	253	80	35	▲ 45
環境・機能材	825	862	29	30	+1
機能繊維・商事	676	689	▲ 18	▲ 15	+2
不動産・その他	94	96	17	21	+5
消去・全社	-	-	▲ 32	▲ 36	▲ 4
合計	2,987	3,073	96	50	▲ 46

7

セグメント別でございます。ざっと見ていただきますと、ライフサイエンスが▲45億円ということで、この部分が減益の主要因でした。

(参考) 四半期別営業利益推移 (セグメント別)

TOYOBO

(億円)

	22年度				23年度		
	1Q	2Q	3Q	4Q*	1Q	2Q	3Q
フィルム	25	▲ 0	▲ 4	▲ 4	12	2	1
ライフサイエンス	21	33	26	12	14	10	11
環境・機能材	9	12	8	11	▲ 7	10	26
機能繊維・商事	▲ 4	▲ 7	▲ 7	▲ 7	▲ 7	▲ 1	▲ 7
不動産・その他	3	6	7	5	4	10	7
消去・全社	▲ 9	▲ 11	▲ 13	▲ 13	▲ 17	▲ 7	▲ 12
合計	46	33	17	5	▲ 1	24	26

*新セグメントでの22年度4Q実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

8

セグメント別の四半期営業利益推移でございます。フィルムは昨年度2Q以降損益を落とし、1Qは12億円と、一旦回復しかけ、基調としては復調ですが、2Q、3Qでは新機台の償却が始まりましたので、損益がなかなか伸びてこない状態が続いています。

環境・機能材につきましては、三菱商事(株)との合併会社が23年4月からスタートし、1Qには立ち上げのコストがかかり▲7億円という赤字スタートでした。エンプラ、不織布などの損益も落ち込んでおりました。しかし、2Q、3Qと、運営が軌道に乗ってきました。3Qの26億円は、若干、前倒し出荷もございましたので、少し数字が出来すぎという部分もあるのですが、順調に伸びてきています。

機能繊維・商事は、▲7億円、▲1億円、▲7億円という推移で、赤字が続いておりますが、衣料繊維につきましてはかなりの回復をしてきております。エアバッグ用基布につきましても、製品価格の改定が進んでまいりましたので、少しずつではございますが、収益レベルは回復してきており、まだ赤字ではございますけれども、回復途上を推移している状況です。

(億円)

	22年度			23年度			増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	743	356	1,100	781	393	1,174	+74	+6.7%
営業利益	24	▲4	20	14	1	15	▲5	▲25.3%
(率)	3.3%	-	1.8%	1.8%	0.2%	1.3%	-	-

包装用フィルム

- 価格改定を進めるも、需要回復の遅れによる低調な荷動きに加え、新機台の立上げ費用が続く

工業用フィルム

- 液晶偏光子保護フィルムは、強い需要に牽引され販売を伸ばす
- セラミックコンデンサ用離型フィルムは、本格的な需要回復には至らず

9

それではセグメントごとに申し上げます。

まず主力のフィルムですが、収益が横ばいの状況が続いております。包装用フィルムは、価格改定を一生懸命進めておりますが、需要回復が遅れており、また、新機台立ち上げ費用が嵩んでいます。工業用フィルムは、液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”は非常に強い需要により販売を伸ばしています。売上高は約40%の増収でした。セラコン用離型フィルムはなかなか本格的な需要回復に至っておりません。売上高は回復傾向にございますけれども、回復の中心がミドルエンドの製品でして、ハイエンド部分でなかなか回復が遅れています。マーケットは年率約7%の拡大基調で変わっておりません。今後、需要回復に向かうだろうと認識しており、お客さまと歩調をあわせながら、増産体制を整えております。本格的な回復までもう少しと見立てています。

(億円)

	22年度			23年度			増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	193	100	293	166	87	253	▲41	▲13.8%
営業利益	54	26	80	24	11	35	▲45	▲56.3%
(率)	28.0%	25.5%	27.2%	14.5%	12.5%	13.8%	-	-

バイオ

- 新型コロナウイルス感染症の収束に伴い、PCR検査用試薬が大幅に減少

メディカル

- 人工腎臓用中空糸膜の販売が堅調

医薬

- FDAより Warning Letter の解除（2023年7月）を受け、収益性改善

ライフサイエンスにつきましては繰り返しのようになりますが、新型コロナウイルス感染症の収束で、PCR検査用試薬が大きく減少いたしました。メディカルは、人工腎臓用中空糸膜の販売が、堅調に推移しています。医薬品製造受託につきましても先ほど申し上げた通り、Warning Letterの解除がございましたので、時間はかかっておりますけれども、新たな受注案件を受けていく活動を本格的に進めてきており、収益性は改善していくと想定しています。

(億円)

	22年度			23年度			増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	557	267	825	525	336	862	+37	+4.5%
営業利益	21	8	29	4	26	30	+1	+2.5%
(率)	3.8%	3.0%	3.6%	0.7%	7.8%	3.5%	-	-

樹脂・ケミカル

- エンジニアリングプラスチックは、自動車生産台数の回復により販売増
- 工業用接着剤“バイロン”は、中国向けの電子材料用途の販売が低調

環境・ファイバー

- 環境ソリューションは、LIBS*製造工程用のVOC回収装置、交換エレメントの販売が大幅増
- 高機能ファイバーは、“ザイロン”の建築補強用途、自転車タイヤ用途が低調
- 不織布マテリアルは、衛材用途や土木・建築用途の販売減に加え、原燃料価格高騰の影響あり

*リチウムイオン電池セパレーター

環境・機能材は、三菱商事(株)との合併で4月にスタートいたしました東洋紡エムシーを核にした事業セグメントです。今期前半はかなり厳しかったのですが、エンプラは、自動車生産台数の回復に伴い販売が増えております。一方、工業用接着剤“バイロン”は、中国向けの電子材料用途が低調でした。環境ソリューションは、先ほど申し上げたVOC回収装置および交換エレメントの販売が好調で、収益に大きく寄与いたしました。高機能ファイバー“ザイロン”は、建築補強用途、自転車用途で需要を減らし、苦戦中です。一番問題なのは不織布マテリアルでして、衛材用途、建築・土木用途の販売が減少し、また、原燃料の売値への転嫁も苦戦し、収益が厳しくなっております。こちらは一つの課題意識として、東洋紡エムシーでも共に認識し、対応を急いでいる状況です。

(億円)

	22年度			23年度			増減	
	上期	3Q	3Q累計	上期	3Q	3Q累計	金額	率
売上高	453	223	676	457	232	689	+13	+1.9%
営業利益	▲ 11	▲ 7	▲ 18	▲ 9	▲ 7	▲ 15	+2	-
(率)	-	-	-	-	-	-	-	-

衣料繊維

- 不採算商材からの撤退完了と製品価格の改定が進み、収益が改善

エアバッグ用基布

- 自動車生産の回復に伴い販売量が増加、製品価格の改定が進み、赤字縮小

庄川工場における令和 6 年能登半島地震の影響について

- 工場建屋および設備の一部に損傷が発生
 - ・加工部門は、1月9日から生産活動再開
 - ・織布部門、および隣接建屋で製造する一部品目の生産再開は 4 月上旬を予定

12

機能繊維・商事ですが、こちらは衣料繊維、エアバッグ用基布、その他の商材、の3つのサブセグメントがございます。衣料繊維につきましては、かなり体制をコンパクトにいたしまして、不採算商材からの撤退が完了しつつあります。製品価格の改定も進め、収益とんとんから黒字を目指せる体制がかなり整ってきております。ようやくここまで来たという状況です。

エアバッグ用基布につきましては、自動車生産の回復に伴い販売量が増加し、増収しておりますが、火災後、高い原糸を調達する構造が続いており、残念ながら赤字です。タイにインドラマとの合併会社としての原糸工場を立ち上げており、今、認証作業を進めております。

元旦に発生しました能登半島地震の影響につきましては、すでにプレスリリースをしておりますけれども、富山県の庄川工場、建屋および設備の一部に損傷が発生しています。加工部門はすぐに再開しておりますが、織布部門は若干遅れているということで、4月上旬の再開を目途としております。今のところ決算に甚大な影響が出るという状況ではございません。何か新しい、発表すべき情報がありましたら、随時連絡をさせていただきます。

2023年度 業績見通し

TOYOBO

液晶偏光子保護フィルムの販売は堅調も、包装用フィルム等の回復遅れにより、
営業利益を 80 億円に下方修正。当期純利益は 10 億円を据え置く。配当は据え置きを予定
(億円)

	22年度		23年度		増減		直近予想 (23/11)
	実績	上期	下期	見通し	金額	率	
売上高	3,999	1,994	2,106	4,100	+101	+2.5%	4,100
営業利益	101	24	56	80	▲ 21	▲ 20.5%	100
(率)	2.5%	1.2%	2.7%	2.0%	-	-	2.4%
経常利益	66	10	40	50	▲ 16	▲ 24.1%	60
特別損益	▲ 60	20	▲ 28	▲ 8	+52	-	▲ 14
親会社株主に帰属する当期純利益	▲ 7	20	▲ 10	10	+17	-	10
EBITDA	291	118	162	280	▲ 11	▲ 3.8%	300
EPS (円)	▲ 7.4	22.8	▲ 11.5	11.4	-	-	11.4
減価償却費	190	94	106	200	+10	+5.0%	200
設備投資	427	300	260	560	+133	+31.0%	560
研究開発費	141	77	83	160	+19	+13.4%	160

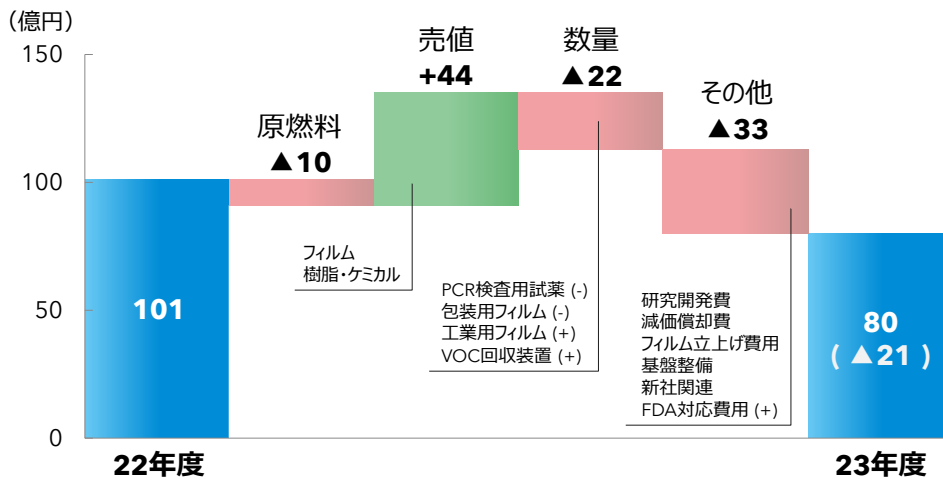
業績の見通しですけれども、ここに書きました通り、液晶偏光子保護フィルム“コスモシャインSRF”は非常に堅調ですが、包装用フィルム等の回復遅れがまだ続き、また、セラコン用離型フィルムも、ミドルエンドから回復基調ですけれども、ハイエンドはまだ回復が遅れています。その状態を考慮し、営業利益は100億円から80億円に、遺憾ながら下方修正をさせていただきました。

ただし、営業外損益、特別損益で、若干の改善を見込んでおりますので、当期純利益は10億円をキープできるのではないかという目途が立ちましたため、据え置きの予想とさせていただきました。

配当につきましては、40円の据え置きということでございます。損益は一時的に落としておりますけれども、今やっております仕込みが、やがてマネタイズのステージに入って参りますことを長い時間軸で見ておりますので、40円の配当は維持してまいりたいと考えております。

営業利益の増減要因

TOYOBO



	22年度	23年度	直近予想 (23/11)
為替レート (円/US\$)	135	144	145
国産ナフサ (千円/kl)	77	69	70

14

残り三か月を加えての増減要因ですけれども、原燃料因が▲10億円です。2Qで発表いたしました時も▲10億円でした。あまり大きな原燃料の動向の変更はないと思っております。

売値因は+44億円ということで、2Qのときには+50億円と発表させていただいたのですが、一部で値上げのペースが思った通りに進んでいないため、6億円下方修正をさせていただきました。

数量因につきましては▲22億円ということで、2Qのときには▲10億円に留めたいということで発表させていただいたのですが、フィルム関連の数量の回復の見立てが想定よりも遅れているということもあり、12億円下方修正しています。

その他因は▲31億円と2Qで発表させていただいておりますが、▲33億円と見ております。フィルムの立ち上げ費用が、実額は減っておりますが、もう少しかかると見ております。

セグメント別見通し

TOYOBO

(億円)

	売上高		営業利益			直近予想 (23/11)
	22年度 実績*	23年度 見通し	22年度 実績*	23年度 見通し	増減	
フィルム	1,461	1,550	16	30	+ 14	55
ライフサイエンス	381	340	92	45	▲ 47	47
環境・機能材	1,108	1,150	40	40	▲ 0	30
機能繊維・商事	924	930	▲ 25	▲ 12	+ 13	▲ 12
不動産・その他	126	130	22	25	+ 3	25
消去・全社	-	-	▲ 45	▲ 48	▲ 3	▲ 45
合計	3,999	4,100	101	80	▲ 21	100

*新セグメントでの22年度通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

15

最後にセグメント別の見通しです。詳しいことは申し上げませんが、フィルムにつきましては、11月に打ち出しました値上げが4Qに寄与をすることを考えております。新機台の立ち上げ費用も減少していくということで、4Q単独で15億円の営業利益を計画しております。“コスモシャインSRF”の堅調さも加わり、何とか頑張れるのではないかと考えています。環境・機能材は、3Qの出来過ぎの部分がございしますので、直線的に伸びていくわけではないのですが、東洋紡エムシーの運営も軌道に乗ってまいりましたので、この調子で頑張ってまいります。

説明は以上でございます。

本資料中の見通しや目標等、将来に関する記載事項は、本資料作成時点において入手可能な情報に基づいて作成したものであり、実際の業績等は、今後の種々の要因によって、本資料の記載事項と異なる場合がありますことをご了承ください。

東洋紡株式会社

All Rights Reserved

TOYOBO
Beyond Horizons

© TOYOBO CO., LTD. All rights reserved.

補足

セグメント別情報

TOYOBO

(億円)

売上高	22年度					23年度		
	1Q	2Q	3Q	4Q*	通期*	1Q	2Q	3Q
フィルム	392	352	356	361	1,461	390	391	393
ライフサイエンス	87	106	100	88	381	81	84	87
環境・機能材	279	278	267	283	1,108	250	276	336
機能繊維・商事	222	232	223	248	924	222	235	232
不動産・その他	31	33	30	32	126	28	38	30
消去・全社	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	1,010	1,001	976	1,012	3,999	971	1,024	1,079

営業利益	22年度					23年度		
	1Q	2Q	3Q	4Q*	通期*	1Q	2Q	3Q
フィルム	25	▲ 0	▲ 4	▲ 4	16	12	2	1
ライフサイエンス	21	33	26	12	92	14	10	11
環境・機能材	9	12	8	11	40	▲ 7	10	26
機能繊維・商事	▲ 4	▲ 7	▲ 7	▲ 7	▲ 25	▲ 7	▲ 1	▲ 7
不動産・その他	3	6	7	5	22	4	10	7
消去・全社	▲ 9	▲ 11	▲ 13	▲ 13	▲ 45	▲ 17	▲ 7	▲ 12
合計	46	33	17	5	101	▲ 1	24	26

*新セグメントでの22年度4Qおよび通期実績は、監査前の暫定値です。今後、変更になる可能性があります。

ビトリマー*の実用化

*再成形性・自己接着性・自己修復性などを有する高機能なポリマー

- ・フレキシブルプリント基板などでの電子部品の接着用途
データ通信の高速化、自動車の電装・電動化で需要が拡大
- ・溶剤フリーで常温流通可能な環境配慮型の高耐熱接着シート
- ・2024年前半サンプル提供、製造販売開始予定



電子材料用接着シートの種類と特長

	熱硬化型接着剤	半硬化型接着シート	新開発の接着シート	
タイプ	溶剤系	無溶剤系	無溶剤系	← VOC排出量を削減
保管・輸送	冷蔵	冷蔵	常温	
熱架橋処理	必要	必要	不要	← 生産工程の短縮、省エネルギー化
樹脂垂れはみ出し	あり	ほぼなし	なし	

2023年10月に岩国事業所の自家火力発電所をリニューアル

- 燃料を石炭から液化天然ガス（LNG）およびRPF*に転換 *RPF：古紙・廃プラスチック類を主原料とした固形燃料
- GHG排出量を、約8.0万トン/年削減見込 ← 岩国事業所の2013年度排出量の約 4 割に相当
- 2030年度までのGHG排出量削減目標の達成に向け、他の拠点においても燃料転換や再生可能エネルギー導入といった施策を推進



カーボンニュートラルへのロードマップ

